氏名： 小玉　亮子（KODAMA，Ryoko）
所属： 人間文化創成科学研究科人間科学系
職名： 准教授
学位： 教育学修士 (東京大学、1986)
専門分野： 教育学、子どもと家族の歴史社会学
E-mail： kodama.ryoko@ocha.ac.jp

◆研究キーワード　／　Keywords

子ども／家族／教育／社会問題／社会史
Children ／ Family ／ Education ／ Social Problem ／ Social History

◆主要業績

総数（3）件

- 小玉亮子 (2008)「PISA ショックによる保育の学校化」泉千勢・一見真理子・汐見稔幸編『世界の幼児教育・保育改革と学力』明石書店、pp.69-88.
- 小玉亮子 (2008)「近代教育とジェンダー―幼児教育における教育者養成システムの歴史から―」日本ドイツ学会編『ドイツ研究』第 42 号、pp.27-35.
- 小玉亮子 (2009)「ジェンダーと教育」姫岡とし子・川越修編『ドイツ近現代ジェンダー史入門』青木書店、pp.103-124

◆研究内容　／　Research Pursuits

近現代のドイツ・日本・アメリカを中心に、子どもと家族に関する比較歴史社会学を専門としている。「子ども」や「家族」に関する自明性を、歴史的、社会学的に問い直すことを課題としている。現在すすめているのは、家族や子ども、教育についての言説分析と制度分析である。

今年度 (2008 年度)2008 年度参加した共同研究は、2006-2008 科研費「男女共同参画社会における男性の『社会化』と暴力性についての研究」(代表佐藤和夫) に研究分担者、2007- 継続科研費「世紀転換期における国民・ジェンダー規範の形成」(代表加藤千香子) に研究分担者として参加した。

刊行した論文には、ドイツについて、現代幼児教育制度について、学力という観点からどのような議論がなされているのかについ分析を行った論文、加えて、ジェンダーの視点から、近代ドイツ教育思想・制度の変遷を分析した論文がある。

2008 年度に研究をすすめ、2009 年度に刊行される予定のものとして、戦後日本に関する家庭教育の変遷についての分析をすすめている。

My research field is comparative social history of education, especially on modern Japan, Germany, and U.S. I am mainly concerned about the obviousness of the “children” and the “family” , which I try to deconstruct from a historical and sociological viewpoint. In order to do this, I set two research strategies, one is the analysis of discourse and the other is the analysis of system and institution.

This fiscal year (the 2008 fiscal year) I published the papers about the early childhood education in contemporary and historical perspective. First, I examined the early childhood education and academic achievement in Germany after PISA. Second, I also analyzed the trend of an early childhood teacher’ s training system and thought in gender perspective in 19th.centry. And I tried to do the analysis about gender issues in education system from 18th.centry to today in Germany.

I also analyzed the trend of the family education in post war Japan, plan to publish the paper in the next fiscal year.

◆教育内容　／　Educational Pursuits

学部では、発達臨床心理学講座において、比較教育文化論に関する講義と、幼児教育に関して国際比較をおこなった文献購読の演習を担当し、幼児教育における大人と子どもの関係について、多様なテーマの下に比較文化的検討をおこなった。この他、教職科目講義 (生徒指導の研究) では、現代教育における、子どもをとりまく暴力と性の問題に焦点を当てた。

大学院では、人間科学系に保育・教育支援コースに所属し、授業では、幼児教育の比較世界史に関する文献購読を行い、特に、ドイツ、イギリス、日本等の幼児教育の思想と制度の成立史について検討をおこなった。

また、あわせて、子ども社会学研究会を開催し、メディアと子どもというテーマで今年度は映画を通して、子どもがどのように表象されているのかを検討した。

Under Graduate education: As the exercise in the 2008 fiscal year, I lectured educational culture in many perspectives, for example gender, power, and so on. In seminar we discussed by taking up the literature on the theme of the comparative early childhood education system. In faculty education, I am also concerned with the education and the management of the teacher-training course.

Graduate-school education: In the 2008 fiscal year, in seminar we discussed by taking up the literature on the theme of the early childhood teacher' s training system and thought in world history.

I also had workshop on sociology of children, and in this workshop we discussed on the children on the movie. This workshop opened for graduate and under graduate students, and will continue in the next year.

◆研究計画

家族と子どもに関する歴史社会学的分析をドイツと日本を中心として共同研究に参加してきたが、2009 年度から新たに参加する共同研究は以下である。2009- 科研費「戦後ドイツと＜過去の克服＞」(代表對馬達雄) に研究分担者として、科研費「『子ども』の保護・養育と遺棄をめぐる学際的比較史研究」(代表橋本伸也) に研究分担者として、科研費「大学コミュニティにおける乳幼児保育の場から生成される重層的カリキュラムの開発」(代表浜口順子) に連携研究者として参加する。

上記の共同研究を通じて、比較歴史社会学的分析に基づく研究成果を踏まえて、家庭教育 / 子育ての思想・制度・実態がどのように展開してきたのか、戦前戦後をこえてその変化について分析を進めて行く予定である。

また、特に、現代の日本を中心に子ども・親子関係について、メディアや言説がどのように議論してきたのか、その変遷に関して分析も進めている。

◆メッセージ

子どもや家族、教育といったテーマは、だれでも語ることのできるテーマですし、多くのことが「あたりまえ」のこととして、共有されているようにおもいます。「やっぱり家族だから」とか、「子どものくせに」とか。でも、そういう言葉をきくとき、違和感を感じることも少なくないように思います。家族ってなに？　子どもらしさってなに？　そういった違和感にたちどまってみたいとおもいます。そして、子どもや家族、教育といった事柄に関わる「あたりまえ」について、少し距離を持ちながら検討していきたいと考えています。

そのためには、比較の視点が重要になるとおもいます。自分がどこに立っているのかを見極め、自分の立ち位置ではない位置から再検討してみること。比較のやり方は様々ですが、時代・地域・ジェンダー・エスニシティといったことにセンシティブになりながら、様々な試みをしていきたいとおもっています。